

業界短信

(21年8月1日～8月31日)

厚板過剰在庫、調整局面へ（鉄鋼新聞、8/3）

厚板シャー在庫がようやく調整軌道に入り始めた。全国厚板シャー工組の月次調査によると、6月末在庫は、前月末比2.6%減の49万9951トンと、3か月連続で前月実績を下回った。わずかだが50万トンを割り、40万トン台は6か月ぶり。直近のピークである3月末実績（55万986トン）に比べ5万1千トンの減少。需要が落ち込み、復調の兆しがない中、先物申し込みをスキップするなど仕入れを抑制、メーカー側も引き受けを大幅にカットし、減産を継続・強化してきたことも寄与した。ただ、需給バランスを示す在庫率は268%。4～5月の294%よりは改善したものの、適正レベルは150～180%とされるだけに、過剰感がぬぐえないでいる。JFE スチールや新日本製鉄など国内の厚板各社は上期中での適正化を目指し、引き受け削減を実施。景気回復が期待薄だけに、減産による供給面での取り組みが、過剰在庫の早期解消になり、それによって切板販価の先安観払しょくにもつながっていく。

日鉄神鋼シャーリング、新ライン導入開始（産業新聞、8/5）

日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は、今月の旧盆休みから、本社工場で多目的シャーラインの導入作業を開始する。作業と試運転は月末にも完了する予定で、稼働は当初計画の10月から前倒しし、9月となる見通し。同設備は、小物切板用のガス溶断機—ピースマーク印字・読み取り装置—寸法・形状測定機—自動パイリング設備の自動一貫ラインで、投下金額は約1億1500万円。同社はこれまで、大板の切板に段階的な設備投資を実施し、効率化を実現してきた。一方、小物材の切板—精整—検査・荷揃えは作業者が指示書を確認し、ポータブル溶断機を用いて手作業で行っていた。こうした状況下で、小物の加工は昨夏以降、増加傾向にあり、ユーザーからの小物への要請にきめ細かく対応していくには多目的シャーラインの導入が必要と判断、今月の旧盆休みから導入作業を開始する。

近江産業、来期レーザー3基体制に（産業新聞、8/10）

近江産業（大阪府中央区、小八木規之社長）は、来期（2010年8月期）の設備投資計画を明らかにした。大型投資としては、鶴浜鉄鋼センターの大型熱延レベラーを改修する。これ以外にレーザー1基を増設し、3基体制とする。導入時期は未定だが、出力6キロワットの設備を導入する計画。

宝鋼、厚板を100ドル値上げ（鉄鋼新聞、8/11）

中国・宝山鋼鉄は先週末、9月分の国内厚板の販売価格を600～800元（約100ドル）値上げする方針を決めた。これにより造船用厚板のベース価格は増値税抜きで4350元（約640ドル）、税込みで約5090元（約750ドル）になる。かねてより下期値上げを目指していた日本高炉メーカーの厚板輸出商談にも追い風になりそうだ。

造船向け厚板、09年度450万トン割れも（鉄鋼新聞、8/12）

造船向け厚板内需が、当初予想から下振れする懸念が出てきた。昨年度実績は約500万トンで、当初10%程度の減少を予想する向きが多かったが、450万トンを割る可能性が出てきている。造船メーカーでは、2012年までの受注残はあるものの、手持ちが2年を切るレベルに近づくと、船台を明けないように、建造ピッチを落とすなどの動きが活発化すると指摘があり、用船料の低迷が続いていることなどから船舶需要に回復の兆しは見られない状況だ。ここへきて日本でもキャンセルが発生し、また中小規模の造船メーカーの経営破たんが出始めている。厚板需要は建産機向けが大きく落ち込んでおり、造船向けの比率が相対的に高まっている。東アジアでは新しい厚板ミルの稼働計画が目白押しで需給悪化を懸念する声が広がっている。

厚板需要見通し、上期低調、3割減（産業新聞、8/14）

09年度上期の厚板需要量は前年比約3割減の水準にとどまりそうだ。鉄連の品種別受注統計によると、厚中板の受注高（内需）は4～6月で前年比33.7%減まで落ち込んだ。輸出も同11.4%減と低迷している。高炉筋では7～9月の方が4～6月よりも厳しいとの見方を示す。一方、下期以降に向けては、①厚板メーカー各社の減産、②流通各社の在庫調整による市中在庫の適正化、③一部分野での需要回復などの期待感も出てきている。厚板の需要環境は昨年末以降急速に悪化した。造船に次ぐ需要分野の建産機向けは、前年比7～8割減と大幅に減少。中国などでは回復基調にあるようだが、日米欧の各地域は想定以上の落ち込みになっており、当面は総じて低調に推移しそうだ。需要の半分を占める造船向けは足元比較的堅調を維持している。過去の豊富な受注により3～4年分と言われる手持ち工事量を抱えていたが、新規受注が7～8割台の減少が続いている。月を追うごとに手持ち量が減少しており、建造のピッチダウン、船表の見直しといった懸念がぬぐえない。低迷が続く需要の中でも、橋梁や鉄骨などの分野では国の景気対策による工事の前倒しで7～9月以降に物件が出始めるとの期待がある。他鋼種に比べ需要回復が立ち遅れている厚板だが、09年度上半期で底を打ち、以降は緩やかに回復傾向に転ずるとの期待が強い。

関根床用鋼板、目を惹くカラフル縞板（産業新聞、8/21）

関根床用鋼板株式会社（千葉県浦安市、関根保彦社長）はの本社事務所の入り口には、カラフルな縞鋼板が玄関マットのごとく、タイル状に敷き詰めてあり、訪問者の目を惹く。将来の商品化を前提に、その使用サンプル例として飾ったもの。元来の機能・性能はそのままに、縞目の持つデザイン性を応用。四角にカットし、カラーコーティングするこ

とで意匠性に富む。バリエーションはエポキシ系、クリア系、パール系、エンボス仕上げ、ナシ地仕上げ、等豊富。原色からパステルカラーまで何十種類にも及ぶ。下地は黒皮、プレメッキのどちらも塗装が可能だ。防錆用のカラー縞板は既に存在するが、床材としてよりも、むしろ景観性に力点を置いたインテリア&エクステリア商材としての利用価値を念頭に置く。

建機需要、10年上期から回復（日金通、8/21）

日本建設機械工業会は、出荷金額ベースで、2010年までの需要予測をまとめ、20日発表した。それに洋と、08年下期から顕著化した需要の低下は09年でボトムとなり、10年上期から回復に向かう見込みとなった。同工業会は、10年上期で6537億円、下期で6735億円、通期で1兆3272億円との需要見通しを立てた。09年上期見通しは5668億円、下期見通しは5702億円で、通期は1兆1370億円となっている。2010年は通期で、前年比16.7%の増加となる。10年計では国内、輸出とも回復を見込み、国内は15.8%増、輸出は17.1%増となる見通し。国内需要の増加要因は、住宅投資の下げ止まりと、公共投資の回復。公共投資は09年下期から財政出動効果が見込まれ、10年も一定水準がキープできるとみている。海外需要増加については、中国市場が引き続きけん引役となり、周辺アジア市場の本格的な回復を見込んでいる。

河合シャーリング、製造現場で「改善塾」（産業新聞、8/27）

河合シャーリング(株)（岐阜県大垣市、河合進社長）において、岐阜県の工業高校生が製造現場でカイゼンを体験するインターシップ「改善塾」が開催された。3校の生徒22人が鋼板加工の工場で、不用品の撤去や安全通路の再整備などを提案、実施し、生産効率向上の取り組みを体験した。改善塾は、経済産業省および文部科学省の補助・委託を受け、岐阜県、岐阜県産業振興センターの主催で07年度からスタート。河合シャーリングは、それまでに研修生を受け入れた企業からの推薦を受け、今年度の受け入れ企業となった。現場研修では、研修生が3班に分かれ、河合シャーの社員とともに、改善点を探し、工場での不用品撤去など整理整頓を中心に安全通路のペンキの再塗装などを実施。研修後、研修生からは無駄の削減により、年間数百万円のコスト削減メリットがあるなどの発表がなされた。初の研修生を受け入れた河合シャーリングでは、研修生の生産現場での姿勢や宿舎でのディスカッションを通じ、熱心さに感心するとともに、研修生の受け入れを地域貢献や優秀な人材の将来的な確保などにつなげていく考えだ。